

なるのかもしれない。けれど、子どもの季節は連綿と紡がれていくことでしょう。そのことを、確か

に感じさせてくれる本です。

(立教女学院短期大学)

## 自己を物語る

— 『きよしこ』 『拡散』 を読む —

浜口 順子

— 星の光る夜、きよしこは我が家にやってくる。すくい飲みをする子は、「みはは」という笑い声で胸をいっばいにして、もう眠ってしまった。糸が安いから— 『きよしこ』(重松清著、新潮社) P. 13

こんな風に「きよし、この夜」の歌を勘違いして覚えていた少年には、自分とよく似た名前の、目に

見えない友達がいた。おそらく、その少年は著者、重松清自身か、少なくともオーバーラップしている誰かである。吃音があつて、転校のたびに苦手な「か」行から始まる名前を自己紹介しなければならぬ。そんな寂しさを抱いた少年は、「きよしこ」には何でも話ってきた(どもらないで)。きよしこは、「本当に伝えたいことは伝えることができる」

と教えてくれる。

小学校から大学受験の冬までの、七編の少年の物語。一つ一つ胸がつまる。苦手な音から始まるフレーズを避けるという反射的な判断、夏休みに通った行動療法セミナーですれ違うように出会ったひねくれ少年と残酷な「先生」たち、神社でキャッチボールをした変な「おっちゃん」、でも友達ができたとたん「警察に捕まったらいいのに」と思ってしまった少年の残酷さ……。少年の前を通り過ぎるいろいろな人たちが、ひとりひとり生きていて、いいところを小出しにしている。

この小説は、ある母親からの手紙がきっかけで書かれた、という設定になっている。

「もしよろしければ……息子に宛てて返事を書いてやってもらえませんか。吃音なんかに負けるな、と励ましてやってくれば、息子の心の支えになると思うのです。」(P. 6)

重松は、返事を書かなかった。そして二年後に、

この「個人的なお話」が生まれた。私小説ではない、という。

お話にできるのは「ただ、そばにいる」ということだけだ、とほくは思う。だからいつも、まだ会ったことのない誰かのそばに置いてもらえることを願って、お話を書いている。

この本に収められた話を、君は自分のそばに置いてくれるだろうか。世界中の誰よりも君にそうしてほしくて、ほくはパソコンのキーボードを叩きつづけた。

「個人的なお話」というのは、そういう意味だ。(P. 8)

もしかしたらこの設定したいフィクションかもしれないが、作り事とそうでないものとの間にどれだけの違いがあるのか、という気もしてくる。人に伝えたいことがあって、その方法はさまざまあるのだし、伝わり方もまたそれぞれなのだから。人を励ますようにして、「私も大変でしたが、今は幸せです。

だからがんばってください。」と言うことが、できる人とそうでない人がいるし、それで励まされる場合とそうでない場合もあるのだ。

『拡散 diffusion「アイデンティティ」をめぐる、僕たちは今』（大倉得史著、ミネルヴァ書房）は京都大学で臨床心理学を学ぶ大学院生が、エリクソンのアイデンティティ概念について、青年の当事者性から論じなおそうとする挑戦的な「作品」だ。研究論文といったほうがいいのだろうか。当事者（友人）に物語らせる、という方法の成功と、（他の場）を再認していく過程の生々しい語りが、日本教育心理学会でシンポジウムのテーマになるなどして注目を浴びた。友に語ってもらいながら、いいかげんにしろよ、と思ってしまう著者の心情の吐露なども面白い。

全編を通じて、いまだにこのように思い悩む学生がいるのかと驚いたり、四半世紀前の自分自身を彷彿

としたりもした。これは大倉も自覚しているように、「京大の学生」的な悩みなのではないかとも思った。「自己を物語る」という建前では、共通の両著であるが、研究書である『拡散』のほうが、どこかフィクション的な印象が強かったのは不思議だ。「事実は小説よりも奇なり」というが、言葉になったものは、そこからばらばらと意味を拡散し、またひとつの中心にまとまる求心性をもつ（バフチン）とするならば、小説の語りのほうが、ライブの語りよりも、心にまっすぐ突き刺さることもあるだろう。「きよし、この夜」の訳詞家がとうてい想定しえなかったような解釈（きよしこの、夜）をしてしまった少年が、その歌に癒されたように。

保育記録やカンファレンスでの話し合いなどを、保育実践研究にどのように活用できるかを考えていたときに、出会った二冊である。

（十文字学園女子大学）